

従順 キリストに倣いて

先週、本棚の片付けをしていたらむかし読んだ山本周五郎の「ながい坂」という小説がでてきました。下巻だけ出てきて、上巻が見当たらなかったので読み直すことも出来なかったのですが、与えられた人生を覚悟と責任を持って生き抜くさまを、「ながい坂」にたとえた小説です。讚美歌に「老いの坂を登りゆき、かしらの雪つもるとも」という歌詞があったことも連想しました。「ながい坂」にせよ「老いの坂」にせよ、わたしたちが杖と頼むのはイエス・キリストであり、この方に寄せる信仰です。よちよち歩きを始めたばかりのフィリピの信徒たちに向かって「従順」を説くパウロは、それぞれがみずからの人生という「ながい坂」を生き抜くにあたって、先立ちゆくキリスト・イエスの従順に、わたしたちの救いを見ていました。今朝は、この「従順」に焦点をあてて御言葉に聴いてゆきます。

パウロは「従順」という言葉を、キリスト・イエスの神に対する生き方の向き、姿勢として用いています。そしてそこから、キリスト・イエスに結ばれたフィリピの信徒たちにも「従順」を学び、生き方の姿勢とするように願っています。それこそがわたしたちを救いの完成に導く唯一の手段だからです。

「だから、わたしの愛する人たち」とパウロは筆を進めます。この「だから」というのは、直前にしるされたキリスト賛歌、イエス・キリストを褒め称える讚美歌の歌詞の引用を受けています。

「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でし

た。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして天上のもの、地上のもの、地下のもの、すべてがイエスの御名にひざまづき、すべての舌が「イエス・キリストは主である」と公にのべて、父である神をたたえるのです。」

だから、あなたがたも、このキリストの従順にならなさい、という勧めになっています。礼拝では数節にわけて読み進めているためにぶつ切りの印象をうけますが、流れで読んでいくと、2章5節から11節までに記されるキリスト賛歌の前後にパウロはフィリピの信徒たちへの勧めを置いています。2章の1節に、そこで、と断って、「何事も利己心や、虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考え。めいめい自分のことだけではなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい」と勧め、その理由としてキリスト賛歌を引用する、やまの頂きにあたります。あるいはサンドイッチの具というか、中身の部分、それをサンドイッチのパンにあたる部分、わたしたち人間の応答、行動への促しが挟み込んでいる。その後半部分が、「だから、いつも従順であったように、あなたがたも、わたしが共にいる時だけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。」と引き取るかたちです。勧めて、根拠をキリストに求め、だからと念を押す、そういう文章の組み立てです。

ところで、「従順」の反対は何かというと、これは「不従順」ですね。従わない、そう言い換えてみるとこれは聖書のはじめから人間がそういう状態であったことが分かります。そもそものちに原罪という言葉で呼ばれるようになった最初の背きも、取って食べてはならないと神にただひとつ命じられていた善悪

の知識の木の実を人間が「神のように」賢くなろうとして食べたことによるものです。神の言葉に従わなかったことによって混沌がわたしたちの生きる領域に怒濤のようにながれこんでしまった。神の言葉に対する不従順、自分を第一として神のように振る舞うことが混乱の第一歩なのです。だから「何事も利己心や、虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考え。めいめい自分のことだけではなく、他人のことにも注意を払いなさい。」という勧めも説得力があるのです。人間は神に対する不従順によって神の怒りを招き、調和と一致のとれた世界を失ってしまったと聖書は考えています。ここから、わたしたちを再び調和と一致の取れた世界に、神の祝福のもとに平安な道を歩ませるために、神はアブラハムを召し出され、地上を祝福するための器とされました。地上の氏族はすべてあなたとあなたの子孫によって祝福に入ると約束されたとおりです。この使命はやがてイスラエル民族に受け継がれ、神の御心を示す律法が与えられます。律法はヘブライ語でトーラーと言いますが「道・教え・指示」といった意味を持つ広い言葉です。とくに「道」という使い方に注目したいですね。わたしたちが歩む「道」、神へ、命へと至る「道」が神の教えである「律法」なのです。かつてモーセはカナンの地を目指すイスラエルの民に、この律法から祝福と呪いを置くと遺言しました。神の教えに従えば祝福、従わなければ呪いが降りかかると。だから、モーセの後継者となったヨシュアに、神は「わたしの僕モーセの命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない、そうすればあなたはどこへ行っても成功する」と教えました。しかし、イスラエルはこれに不従順でした。右にそれ、左にそれ、結果的に滅び、アブラハムの子孫であるイエスがこの律法の道、神の御心の示す道をまっすぐに歩まれたの

です。今朝は棕櫚の主日、イエス様がエルサレムに入られた日ですが、「ダビデの子にホサナ」と叫ぶ群衆に迎えられて、ロバの子の背中に揺られて入城するイエスの姿は最後の王として、民の背きのいっさいの責任をご自身の身において処断するために、十字架の死、もっとも残虐な刑罰としての死を覚悟しておられる姿です。ロバは荷を負う動物ですから。この十字架の死に至るまで従順なキリスト・イエスによって祝福の道が再び引き直された。神がこの方の、この歩みの方向性を「よし」とされたからです。そのあかしが復活なのです。だから、この方の歩んだ御足のあとを追ってゆくことが罪と死の問題に対する解決であり、わたしたちの救いの完成となる。福音はそのことを指し示します。

イエス様は十字架の死を遂げるまでに度重なる受難予告をされました。それはこの十字架の死が、人によってはそれがイエスの運命だったというような表現をすることもあるかと思いますが、そうではない。キリスト者は運命ではなく、神の摂理を信じているのです。運命という言葉の時々わたしたちは使いますが、抗いがたい出来事に対して、人間の無力さを言い表すために、なかば諦めをこめてこの言葉を使う。しかし、わたしは運命という言葉を使うべきではないと思います。イエス様はみずからの意志で十字架に向かわれているのです。運命ではない、みずからの意志、神の御心に対する服従なのだと言いつつ繰り返してこられた。そんなことがあってはなりません、という弟子たちの声を振り払ってまで、十字架の死を遂げるためにエルサレムに上られた。それは運命ではなく、神の御心に服従する主イエスの従順さの表れであり、わたしたちのためにご自身を差し出される愛の行いでありました。明確な意志がある。イエス様はみずから十字架に向かわれ、みずからわたしたちのための贖

いの供え物としてご自身をささげられたのであって、敵によって不本意に命を奪われたのではない。十字架の死にいたるまで従順でした、というキリスト賛歌は、このイエス様の神に対する服従、わたしたちに対して向けられているご自身の決断にもとづく歩みに向けられているのだということをわきまえておきたい。そしてそれがわたしたちキリストに洗礼によって結ばれた者たちへの招きとなっている。キリスト・イエスが歩かれた道こそ、命の道であることをパウロは確信しています。だからフィリピの信徒たちに、いつも従順であることを勧めます。何事も不平や理屈を言わずに行うことを勧めるのです。それはキリスト・イエスがわたしたちのために命を十字架に置いてくださったように、わたしたちも互いに命を置きあう仕え方を意味しています。利己的な生き方ではなく、利他的な生き方です。仕えさせるのではなく仕えるために来たといわれた主イエスに従う道筋です。恐れおののきつつ、みずからの救いを達成するためにそうせよと言うのですが、ここでもすでに神さまがあなたがたの内に働いており、身心のままに望ませ、行わせるのだとわたしたちのうちに働かれる神の御心を捉えるように勧めます。恵みがさきに与えられているのです。からの雑巾を絞って水を出せと言われていたのではない。ゆたかに与えられる命の泉、神の御言葉に留まっていれば、そのことによってわたしたちは潤される。ここでの表現にしたがえば、世にあって星のように輝くのです。ここは太陽ではなく星であるところがパウロが分かっているところですね。太陽はそれ自体が熱と光を放つ存在です。しかし、わたしたちは太陽の光を反射する存在です。義の太陽であるキリスト・イエスの御言葉を宿すことによって、その言葉に従順であることによって、わたしたちの内に主が働いてくださる、そこに信仰の業として神の出来事が表される。

特にそれは赦しの業において、他者に仕える働きにおいて、また逆境において夜空の星のように輝くのです。牢獄の中にいて喜べる力を知れば、人はそれは何故かと問うでしょう。福音によって、わたしには何でも可能です、とパウロは答えたに違いありません。このように苦難や逆境は、福音の力を輝かせる。それは自力ではなく、この手紙の1章でパウロが述べたように「あなたがたの中で良い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています」という、神が始められた出来事であるゆえに、神が負ってくださるという信頼に支えられています。わたしたちは神に愛され、選ばれ、結ばれたのだから、すでにそのような者とされ、歩めるのだから、そのことに目を留めて、十字架の道を行きなさい、御言葉に従順でありなさいと勧めるのです。今日から、わたしたちは受難週の日々を歩みます。キリストが歩まれた道を御言葉によって辿りながら、そこに示された主の愛を、御子を砕かれた神の深い御心を心に留めながら、生き方の向きを整えたく願います。命の言葉に留まりましょう。

お祈りいたします。